東京幻視芸能考

記録作家　石飛　仁（会員）

はじめに

昨年来、私は近世と現代の二つの歴史テーマに向き合う必要がでてきて都内を歩き回りました。日常見慣れていた東京ですが、歴史の重みを秘め、急速に変容する姿は不気味でさえありました。人の流れを吸い込んでは吐き出す日本の心臓部大東京を、覗いたついでに、何度も廃墟を体験してゼロから再興したこの不思議な大都市の魅力を、文化芸能を切り口にして、解いてみたいと思います。この国際善隣協会の機関誌としては、少々毛色の変わった〝都市風景抄〟とでもいう駄文、二回になりますが、会員暦十数年になる私が、記録作家系演劇人という宿痾を身に着けた異端であることから、目くじら立てずに少々お付き合い願っておきたいと思います。

私が、東京を歩き回り埋もれた歴史の幻影を掘ることになった二つの歴史テーマというのは、江戸城を造った太田道灌につながる三田樹木谷（港区）にあった「松久寺」（慶長十年一六〇五年に麹町に誕生し、明暦三年一六五七年の江戸大火の後に、三田樹木谷に移転し、昭和四十二年一九六七年に鎌倉浄明寺町にさらに移転し廃寺直前のところを四十四世市川智彬住職が再興した曹洞宗の寺）のルーツ調べであり、もう一つが、先の大戦で、東京大空爆（昭和二十年一九四五年三月十日）によって廃墟となった東京浅草で、生きんがためのバタヤ共同体「蟻の街」（隅田公園内）を造り、そこで奇跡的な十年を貫徹した人々を詳しく調べるというものです。

其の一

一、文武両道の太田道灌が築いた江戸城の梅林

今年の「善隣」五月号表紙を飾ったのが、江戸城天守閣跡の石垣でした。広大な江戸城内の本丸御殿や大奥の前に聳えていた天守閣は、明暦三年（一六五七年）江戸大火（別名振袖火事。後述）の延焼によって炎上して以来、再建されること無く、石垣だけの江戸城天守閣として、三百六十一年後の今日に至っているものです。私が、今上天皇になってから北の丸公園として一般公開されるようになっ

①太田道灌が植えた数百本の梅ノ木は、急坂に面して、今もおなじ場所にあった。

たこの本丸御殿・大奥の跡地に駆けつけたのは、太田道灌（一四三二～一四八六）による築城（長禄一年一四八六年）以来、今日まで絶えることなく城内の一角に植え継がれていた梅林の存在をこの目で確認するためでした。江戸城天守閣跡に登ってから東方に向かって急勾配の坂を降りていくと、その両側の一角に梅ノ木が林立していました。［写真①］

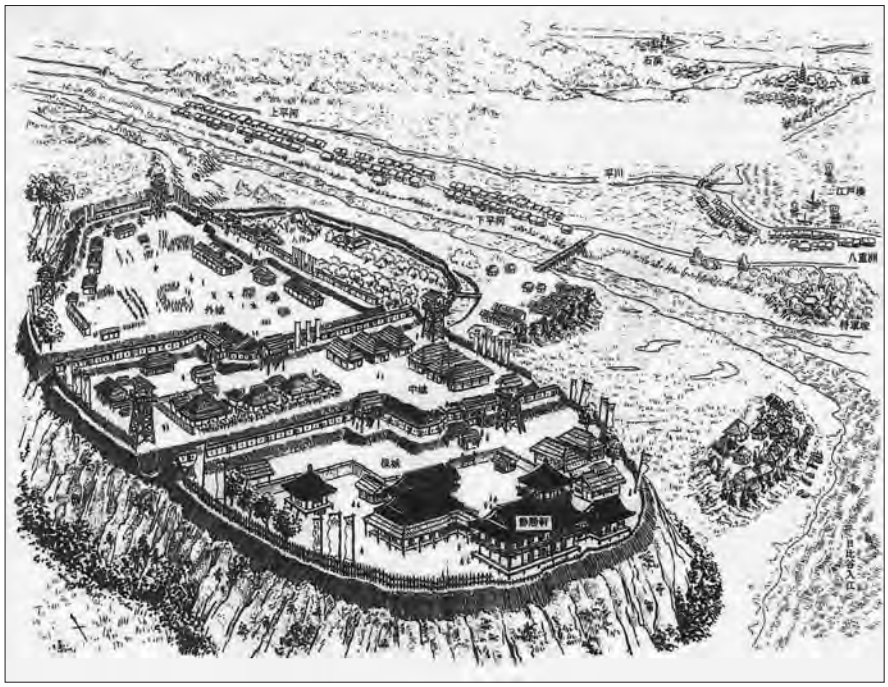
この梅林の解釈は、城の中で実のなる木として戦国武将には大変重宝がられていただけのことではなく、太田道灌は、学問の神様右大臣・菅原道真（八四五～九〇三）に深く傾倒していたことから、梅の花を愛した詩の大家にあやかって、城内に梅ノ木を大切に育てていたなごりです。そしてその梅林の隣に崇敬する菅原道真を祭る天神社も文明十年一四七八年六月に建立していたのです。

戦国期（鎌倉末期から室町にかけて）の武蔵野国支配の中核地は、江戸湾から平川を上って物資を運んでいた川越（埼玉県）でした。この地は後の江戸幕府を支えていた重要な地域で、背後には秩父山地を控えた地勢にあり、水の供給源となる武蔵野台地（各地に湧き水あり）だったのです。太田道灌と父の太田資清（岩槻城主）は、川越の近くの越生を本拠としていた時代がありました。彼ら親子は、その地の名刹「龍穏寺」曹洞禅（兵火で消失）を、鎌倉から続く禅僧の指導を受けて帰依していた縁で、この寺を再興しています。そのときの「龍穏寺」五世住職が、関東数奇文化（鎌倉発栄西の茶道と風流の粋の文化）を身につけた曹洞禅の僧・雲崗舜徳でした。

太田道灌は、若くして江戸城を建設して城主（長禄一年一四五七年・二十五歳）となったのですが、その折に、江戸城内に、詩を学ぶ学習館「静勝軒」（住居も兼ねる）を建てています。太田道灌は、戦術戦略に長けた連勝の戦国武将として名高いだけではなく、鎌倉五山や京都五山から高名な詩僧（万里集九等）を招き、その指導を受けた文武両道の人だったのです。一説では太田道灌自身の作詞では

ないかとまで言われて残っているのが、有名な「七重八重花は咲けども山吹の実の一つだに無きぞかなしき」ですが、出陣するときには必ず同僚武士たちと鎧の姿で歌会をやっていたという、文芸にも誉れ高い武将だったのです。

太田道灌が造った江戸城（この時、室町幕府の将軍は義政）を、現代に復元した想定図（西ヶ谷恭弘復元・香川元太郎イラスト）があります。［図②］



②太田道灌が築いた江戸城（復元想定図）
江戸時代の本丸大地上に三つの曲輪を連郭状に掘り切りにして区切って、根白の先端に「静勝軒」（居間）を建てていた。（西ヶ谷恭弘復元・香川元太郎イラスト）

これを見ていただきたいと思います。道灌が造った時代の江戸城は、まだ石垣は積み上げられておらず土塁城ですが、軍団の訓練場宿舎とともに、天神社や梅林がちゃんと描かれていますし、江戸湾から富士山や筑波山に江戸湾の三方を遠望できる詩想を練る館「静勝軒」もしっかり描かれています。陣の中心を「静勝軒」と名づけたのは、太田道灌にとっての戦陣の哲学が、静かに攻めて静かに勝利するというものだったことからつけた戦略上の含意があるネーミングです。殺戮に明け暮れる、武将の生死観が「能」の幽玄に込められていたように、太田道灌の心のうちには激しい戦闘に臨む虚無が身体にしみていて、その世界観が思念に込められていたと思われます。

二、太田道灌の菅原天神崇敬を伝えた「松久寺」のルーツ

さて、どうしてそのことが、わが「松久寺」（鎌倉に現存する曹洞宗四十四世の社寺）のルーツ調べとつながるのかということについて触れておきます。「松久寺」の親寺は、現在も港区芝愛宕山に存在する曹洞宗江戸三大寺の一つ「青松寺」（宗門の学窓）です。実は文明八年一四七六年に、この「青松寺」を麹町貝塚に創建したのは、太田道灌です。彼の意図と構想を考えておくには極めて重要な創建だったことが窺えるのです。この「青松寺」の初代住職になった人こそ太田道灌の人生の師である、「天龍寺」再興時の住職雲崗舜徳（うんこうしゅんとく）その人でした。越生（おごせ）時代からの師弟間の強い絆がこの「青松寺」を創建させていたのです。江戸城内の詩の学習所でもあった「静勝軒」での、文人受け入れだけでは、間にあわない問

題が築城後に起きていたのです。太田道灌が江戸城を築いた十年後の応仁一年一四六七年、京都で「応仁の乱」が勃発してるのです。京都五山の東山文化がいよいよ花開かんとするとき京市街を舞台に、東西に軍が分かれての戦乱が起き、戦場となった京都は衰退する一方になったのです。文芸を磨き禅を極めようとする京の文人たちは、戦場の京を離れるしかなくなったのです。彼らは、関東に逃げて保護者を求めるようになったのです。その受け皿の一つが、教育機関としての「青松寺」であり、その周辺に末寺の創建が相次ぐことにつながるのです。太田道灌には、上杉一門の発展を頭に描いていた軍事戦略構想があり、文人の保護を生かして国の基礎教養を拡張しようという腹がありました。そこで、尊敬する雲崗舜徳を初代住職にして「青松寺」を創建しその受け入れ先としていたのです。

ところが、連戦連勝の途上にありながら想定外にも、主君の上杉定正に呼び出されて上邸するや、くつろげと言われて、風呂を浴びた上がり場で、槍で刺されて絶命するのです。

彼は叫びます「一門の最後なり」と、浅ましい猜疑な嫉妬が、一門の将来を潰したという無念の叫びでした。文明八年一四八六年五十五歳での死です。このとき、京都五山から太田道灌が賓客として江戸城に迎えていた詩僧がいました。『梅花無尽蔵』の作者で知られる万里集九でした。彼は道灌の無念の死をモロに受け止めています。知の英雄太田道灌を敬愛したこの万里と禅一門の「青松寺」僧徒は、引退し越生に居た父の太田資清とともに、太田道灌の回向を唱え続けました。平安時代深く日本文芸を興した悲劇の右大臣菅原道真を崇敬して祭ってきた太田道灌の悲劇が、重なりあって霊魂よ靖（やすら）かれと禅僧の読経が続くのです。

この太田道灌創建の「青松寺」の末寺である「松久寺」（一六〇五年に青松寺十世住職道牛によって創建）こそが、その無念を継承自覚した末寺として成立していた、というのが私のルーツ追跡調査の目的だったのです。

江戸城の半蔵門口の近く、麹町六番町に建立された「青松寺」の末寺「松久寺」は、通常の寺と違って、阿弥陀仏を祭る本堂と並立させて境内に「花城天満宮」を建て、菅原道真を大きく祭った特異な寺だったのです。麹町六番町にあった「松久寺」は、後、明暦三年の江戸大火から十一年目の寛文八年一六六八年に、麹町六番地から三田樹木谷に移転しています。そこでの話になりますが、その話というのは次のようなことです。菅原道真が四十二歳のときに自作した「菅公坐像（三寸八分）」がありました。五十七歳のとき九州大宰府に左遷され、京都を発ち、大和（河内土師（こうちはじ）の里）の伯母覚寿禅尼にいとまごいに立ち寄ったことがありました。そのとき、伯母に請われて自作の菅公坐像が、伯母に預けられていました。年月ははるかに過ぎ、江戸文禄（一五九二～五年）の頃に、その「菅公坐像（三寸八分）」が、三田樹木谷の「花城天満宮」に持ち込まれて、本地十一面観音の腹の中に、納められ祭られるようになったのです。不思議な光を放つという「菅公坐像（三寸八分）」の江戸への搬送は、お上の許しを得ての所業です。

この話が江戸古文書『御府内寺社備考』（名著出版）の中に残されていたのです。別の記録では、江戸期のこの「松久寺」は、門前に月の二十五日に市（いち）が立って大変にぎわった神社とあります。脇の坂道は「神社坂」と呼ばれ、坂は今も残っています。まあ、それほどのことでないと日本橋からは郊外でもあるし、江戸の名所として浮世絵になるまでにはなっていなかったものと思います。確かに、『江戸名所図会』に「花城天満宮」として描

④『江戸名所図会』より。「松久寺花城天満宮」の隣には「光台院」「源昌寺」「覚林寺」があり、いずれも現存している。

③三田樹木谷（港区）にあった「松久寺」境内の「花城天満宮」。奥に松久寺の屋根が見える。

かれています。［図③④］

「花城天満宮」の「花」は梅の花です、「城」は江戸城のことで、「天満宮」は菅原道真のことです。私たちはここで菅原道真の名句を忘れるわけにはいきません、「東風吹かばにほひおこせよ梅の花主なしとて春を忘るな」。今の鎌倉にある「松久寺」の家紋は、菅原家の家紋と同じ梅の花です。室町の晩期戦国武将の道灌によって花開く関東の文芸・数奇文化は、禅と天神信仰に重なって確実に後の江戸町人の文化に受け継がれ、江戸代々をつなぐ一つの照射線が「松久寺」だったことになるのです。［写真⑤］

戦国武将の怨念が、江戸庶民を巻き込んだ「粋」の流れに変容していく一つの具体をしめせたとおもいますが、平安時代の学問の神様の祟りを含んだ悲劇は、江戸盛況の元禄を経て人形浄瑠璃から歌舞伎の十八番『菅原伝授手習鑑』（延享三年一七四六年）となってよみがえっています（有名な十八番仮名手本忠臣蔵はその二年後が初演です）。日本人の心性に触れる「粋で成り立つ芸能歌舞伎」は、江戸時代において確実に地歩を築いていたのです。

⑤「松久寺」は現在鎌倉浄明寺町にある。

三、慶長八年一六〇三年、征夷大将軍徳川家康、江戸城に入る

江戸開府の十三年ほど前に、徳川家康は秀吉に小田原北条を討伐（天正十八年一五九〇年）した褒美に、太田道灌が残していた関東に国替え（移封）を命じられています。したがって、十三年後の江戸開府までの間、江戸城は変化していますが、その歴史は、はなはだ不明な点が多いのです。私はしきりに図書館通いをするのですが、なかなか幻視するまでにいたらないのです。古地図を手繰り寄せては、その前後の変容振りを知ろうとするのですが、古い江戸を幻視するには、風や地形の高い低い、溝や崖の跡の変形振りを目視して、残された石碑等を手がかりに歴史を追うしかないのです。まずは、その地に立ってみるのが一番でした。徳川幕府開府以後に整備されていった江戸城の北の丸公園を、なめるように歩き見た後、私は、文明十年一四七八年に道灌が城内に父親も手伝って造った「川越城」に倣って造っていた天神社が、徳川の代になって堀の外に出されたという「平河天満宮」の現在の所在を求めて、桜田門をくぐって堀端に沿って麹町方面に上っていきました。

秀吉時代の関東の支配者として江戸城に入った徳川家康が、初めて太田道灌の江戸城を見て菅原道真を祭った平河天満宮があるのを知って「太田道灌らしいねえ」と為政者としてそのゆき届いた人心把握力をたたえたというエピソードが残っています。

太田道灌は、江戸で最も高い切り立った丘を、最強の城を建設する地として武蔵野の台地の先端の紅葉山を選びました。品川沖から船で何度も江戸周辺を回り、湯島台地、上野台地、駿河台台地（神田山あり）を候補にして吟味の末、一番高い麹町紅葉山台地を選んだと言われています。もっとも、かつて秩父平氏の一族である江戸氏が、同じところを山城にしていた歴史があり、道灌はその後釜になったにすぎないという説もあります。結局、この立地が関東一円を視野に入れた抜群の地だったわけです。ちょうど首都だった鎌倉と川越の中間点であるこの平川周辺は、後に徳川幕府になって開城されると、一大土木工事が始まって、大阪城以上の国の中心都市として、谷を削り、池や湿地帯を埋めて、運河を造り江戸百万都市を目指した世界一の都市になっていくのです。

現在、太田道灌が麹町貝塚に創建した「青松寺」のあった場所は「貝塚」という地名を残す立て札が立っており、「平河天満宮」も、麹町台地の坂道の中にありました。今ではいたるところがコンクリートのビル街になっていますから、かつての急勾配の坂も、大きな道に削り直してあって、そこが崖だったとは気づきませんが、東京では一番高い丘の上に開かれた街だったことには違いがないところでした。

四、明暦の大火が、江戸城下を循環型人工都市に変えた

江戸城のシンボルであり、石垣の下から金の鯱までが五十一メートルもあった日本一の天守閣が、炎上したまま、再建されることが無かったというその明暦の大火事が、大変に気になります。火付け犯人をめぐっては、謎めいた話が残っています。その大火の概要は次のようなものでした。『江戸の災害と復興――天下大変』（江戸文化歴史検定協会編集）を参考に、この火事の概要を押さえておいてから時代背景に踏み込んでみましょう。

「明暦の大火は3回にわたり出火した。第1の本妙寺の出火では、湯島・神田を

なめつくし、日本橋・茅場町・八丁堀へ広がり、南は木挽町で焼け止まった。第2の小石川の新鷹匠町からの出火では、江戸城の北側の武家屋敷一帯を、さらに江戸城の天守・本丸などを焼き、大名小路から京橋方面を焼き、海へ至って焼け止まった。第3の麹町から出火は虎ノ門・桜田・愛宕下・芝口を焼土と化した。これにより江戸の町は六割が焼失した」。

第3の出火が麹町の山王神社近くとなっていますが、この山王神社は、現在赤坂にある日枝神社のことで、江戸城内に太田道灌が天神様とは別に、建てていた地霊の神社（築土明神）のことです。実は、太田道灌は城内に三つの神社を建てていたことになります。その第3の地霊の神社は「荒神宮」（別名「築土明神」）というもので、地霊の荒神様とは出雲のスサノヲではなかったかと思われますが、江戸期に他の二つと同じ時期に、牛込のほうに移されています。

で、明暦の大火事では、火付け犯人として、二十人の浪人が処刑されているのですが、真犯人は別にいるという噂は広がるばかりだったようです。第1の出火場所が本郷の丸山本妙寺ですが、このお寺では、自殺した娘が着ていた振袖を祈祷して火にくべると、風が吹きこんで燃え広がって火元になったという話です。明暦の火事が「振袖火事」とも言われているのは、それ故のことです。しかし、終始消えない噂というのがあるのです。火付け真犯人は、妙法寺の「お咎めなし」ということとも重なって「幕府だ」という者がいたのです。穏やかではないこの噂には、当時の政治情勢があったのです。そのころ江戸にあふれていた不平浪人を一網打尽にしようとした幕府の荒治療だったとするのがその噂の根拠です。なぜどうしてということですが、この大火事の後、新都市計画の青写真がたちまちのうちに出来上がっており、江戸城と周辺の改築が極めて抜本的に成されているのが何よりの証拠だというのです。

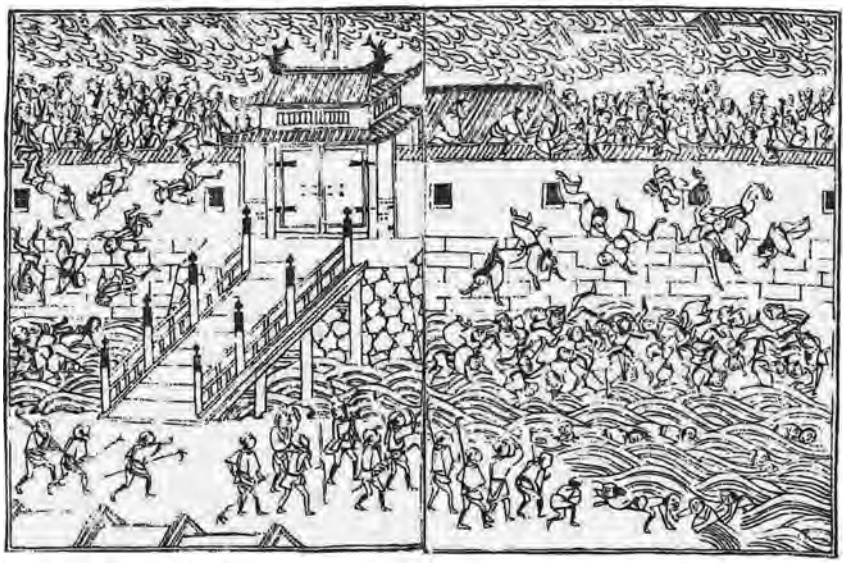
五、浪人狩りに手を焼いた幕府の窮余の一策説

江戸幕府開闢以来、江戸の町政は、試行錯誤による混乱が続いていて、身分制度に沿った円滑な行政は、困難が多く、なかなかすぐには整っていかなかったのです。大きな障害となっていたのは、戦国時代が終わって、平和産業に移行しなければならないのに、吸収合併や合理化による藩の「改易」（取り潰し）による首切りだけでは、浪人は江戸の町に膨れるばかりです。江戸開府時は、腕力を使って生きてきた戦国時代の荒くれ戦士であふれるようになったのです。しばらくは、足軽たちによって、道路作りや運河作りの土木仕事がありましたから、戦場での武士の城作りの延長で、土木工事をやったのですが、いつまでも公共投資の土木仕事があり続けるわけではありません。意識転換が必要だったのです。城盗り戦争はもう無い平和な時代が訪れていたのです。ですから、仕官の口を失ったかつての戦士と軍属は、浪人（浪士）となり生きんがために狼藉を働いてでも、その日暮らしを送るしかなくなっていくのです。幕府は取り潰しにあった元武士による反抗を恐れて、禁制札を矢継ぎ早に出して、反抗の芽をつぶしにかかります。悪所が次々に出来て、博打が流行り、闇社会が膨れあがっていきます。それにつられて非合法をやらせる悪徳商人もまた生まれます。ついに、世直しをと叫ぶ、不平浪人が結集して幕府攻撃の乱を起こします。慶安四年一六五一年、江戸幕府が出来てちょうど半世紀、由井正雪・丸橋忠弥による倒幕計画「慶安事件」が発生するのです。

不穏な江戸の街では、髑髏（どくろ）や閻魔（えんま）大王や墓所の絵を染め上げた着物が流行し、

目をむき口を開いて、体を奇妙に折り曲げて踊る「柴垣節（しばがきぶし）」が不気味な音を出して繁華街を練り歩くそんな世相になっていきます。付け火犯人の中には、丸橋忠弥の残党がいたからと浪人たちの仕業ということになって処刑されても、火元の「丸山本妙寺」は、何にもお咎めなしどころか、後には寺の序列が上げられての幕府御用の日蓮宗です（別の日蓮宗派には不受不施派があって、これは反対にキリシタンのごとく大弾圧されています）。

明暦の大火事の翌日のこと、幕府は、幕府が転覆したという噂が立つといけないからと、早馬を飛ばして全国に将軍安泰を知らせています。復興計画の指揮をとる老中松平信綱は、関東一円の天守閣が焼けたが心配はいらぬ、持ち場を離れず、耕作に励めよと触れを出しています。幕府が、示したかったことは、戦国時代では城盗りの象徴だった天守閣だったが、もはや無用の長物であり、世は天下泰平なのだから天守閣は造らないと宣言してのことだったのです。



⑥浅井了意『むさしあぶみ』より。浅草門の大惨事
浅草門が閉じられたため三方から炎に追い詰められて死んだ人は二万三千人に上ったとされる。

明暦の大火事の時、開かずの浅草門で焼死多数が出た話は、特に残忍です。［図⑥］

そこだけで二万三千人が焼死しているとあるのです（出典は浅井了意の『むさしあぶみ』）。この明暦の大火の死数は全部で十万人を超えたと言われており、街の六割を焼失しています。まさに焼け野原の江戸になったのです。そこで四代将軍家綱（慶安四年一六五一～延宝八年一六八〇）は、矢継ぎ早に都市大改造の新政策を打ち出していきます。実は、移転計画自体は焼失する前からあったのです。例えば、日本橋界隈の岡場所としての吉原遊郭（葦の林に点在していたのが語源）は、新天地の浅草郊外に区画整理された美しい町に移されていくのです。移った先の吉原遊郭は、次第に幕府をささえる体制文化といったものになっていくことになるのです。これは、あくまでも新都市計画があってのことであり、その一例にすぎないのです。寺町の整理から、紙敷き製造場から、大工町から芝居まち、魚河岸から米蔵から、日常生活が円滑に営まれるように各業種別市場を作りながら都市づくりが進められていくのです。これらのことは、身分による仕事仕分けが伴って出来上がっていくのです。江戸時代を身分制度が確立された封建時代として評価できないとする人もいますが、見落としてならないのは、役割分業化することで都市として全体の総合機能を補完し合った循環型の街づくりになっているということです。（つづく）